

egoism という言葉は、「利己主義」としばしば訳されるが、「～ism」とくればつねに「～主義」と訳せばよいわけではない。「利己主義」と訳してしまうと、ある種の価値判断を必ず含んでいることになってしまいそうだが、egoism という言葉には、価値判断込みの意味と、事実を記述するだけの意味の二通りがある。価値判断込みの意味とは要するに、「人は利己的であるべきだ」という当為であり、事実の記述の意味とは、「人は利己的である」という事実である。これをとりあえず〈当為としての利己主義〉と〈事実としての利己主義〉と言い分けることにする。

これとは別に、利己主義は二つの形態を区別することができる。第一の形態は、「各々の者は、各々の利益を最大化するように行動する（べきだ）」というものであり、第二の形態は、「すべての者は、私の利益を最大化するように行動する（べきだ）」というものである。前者は、各人が自分勝手に行動するような状況を指し、後者は、一人だけ王様のような者が存在して、他の者達は王様に仕えているような状況を指している。永井均（*1）に倣って、前者を〈普遍的利己主義〉、後者を〈徹底的利己主義〉と呼ぶことにする。

すると、利己主義には四つのものが区別できることになる。当為としての普遍的利己主義、事実としての普遍的利己主義、当為としての徹底的利己主義、事実としての徹底的利己主義である。事実としての普遍的利己主義は、ある程度人間社会の真実であるかもしれないが、議論すべき興味深い事項を含んではいない。また事実としての徹底的利己主義は、明らかに事実に反している。

当為としての普遍的利己主義はある種の個人主義なのであるが、〈囚人のジレンマ〉という状況が認識されて以来強い批判にさらされている。現実には囚人のジレンマと同型の状況はほとんどなく、存在するのは多人数囚人のジレンマ（multi-person prisoner's dilemma）という状況であり、これは〈共有地の悲劇〉という状況とほぼ同型である。

囚人のジレンマとは、たとえばある犯罪の二人の共犯者が別々に尋問されており、二人とも刑事から次のように言われてゆすりをかけられている状況を指す。「お前が自白して、もう一人が黙秘を通せば、お前は司法取引で無罪放免、もう一人は懲役10年だ。お前ら二人ともが自白すれば、二人とも懲役5年。お前が黙秘して、もう一人が自白すれば、お前は懲役10年でもう一人は無罪放免。お前ら二人ともが黙秘すれば、二人とも懲役1年だ。」このようなことを言う刑事がいるかどうかはともかく、それぞれの犯人には、黙秘か、自白か、の二つの選択肢しかない。二人にとって最善の選択肢は、二人とも黙秘を守り通して仲良く懲役1年になることだが、実際には、次のようにそれぞれが考えて二人とも自白し、仲良く懲役5年をくらってしまうことになる。「もう一人が黙秘するなら、俺は自白したほうがよい、そうすれば無罪放免になるからだ。もう一人が自白したとしても、俺は自白したほうがよい、なぜなら自白しないと懲役10年になってしまうからだ。つまり、

俺はもう一人が何をするかにかかわらず、自白したほうがいいのだ。」というわけである。

現実には、自分が特定の誰かと〈囚人のジレンマ〉的状況に陥っていることが分かる、ということはほとんどない。それこそ、二人の共犯者が捕まって、自白させるために刑事が一芝居打つような場合でしか、お目にかかれないのではないだろうか。現実によく存在している状況は、多人数囚人のジレンマというものであり、これは囚人のジレンマでは2人であったものを多人数に拡張したものである：N人の人がいるとして、それぞれの者が、〈協力〉と〈非協力〉の二つの選択肢を取ることができる。自分以外のN-1人のうち、〈協力〉の選択肢を取った者の人数をMとすると、自分は〈協力〉の選択肢を選ぶことで、 $1+M$ の利益を得ることができ、〈非協力〉の選択肢を選ぶことで、 $2+2M$ の利益を得ることができ、〈非協力〉の選択肢を選ぶのが理にかなっている。なぜなら、他の者のうち何人が〈協力〉を選択しようと、自分としては常に〈非協力〉を選んだほうが得だからである。かくして皆が〈非協力〉を選ぶため、各人の利益は2となる。これは皆が〈協力〉を選んだとしたら得られるであろう各人の利益のNよりもはるかに小さなものでしかない。

これと同型の状況は、動物の乱獲、牛の過放牧などに見出される。動物の乱獲では、それぞれの猟師が「他の猟師がどのような行動を取ろうと、自分としてはなるべくたくさん動物を仕留めるのがよいに決まっている」と考えて動物を乱獲し、動物が激減する結果、共倒れになってしまう。また牛の過放牧では、それぞれの牛飼いが、「他の牛飼いがどのような行動を取ろうとも、自分としてはなるべくたくさん牛を放牧した方がよいに決まっている」と考えて牛をたくさん放牧し、えさとなる雑草が食べつくされてしまう結果、共倒れになってしまう。一般に、財は排除可能性と、競合性の有無によって4通りに分類されるが、排除可能性がなく、競合性があるような共有資源においては、一般的に同様のことが発生しうる。

多人数囚人のジレンマのような状況があるのだから、当為としての普遍的利己主義は間違っている、と主張することは適切である。各々が自らの利にかなった行動をしようとすると、結果的に皆が損をするということがあるのだ。当為としての普遍的利己主義を皆が遵守しようとすると、まさにその利己主義の基準で（つまり、どれだけ自分の利益になるかという基準で）失敗を導いてしまうのだから、当為としての普遍的利己主義は、自己破壊的（*2）である、というわけだ。

しかしながら、当為としての徹底的利己主義に対しては、そのような批判は不適切である。当為としての徹底的利己主義は、「すべての人間は私の利益を最大化するように行動すべきだ」と説くのであった。一人の人間の利益を最大化するために、世界中の人間に何ができるかを想像してみるのには、文学的に興味深い。彼はかつての専制君主のような生活をするようになるのだろうか。あるいは彼が男だとしたら、彼は世界中からえり抜きの美女を集めたハレムで快樂に耽る生活をするようになるのだろうか。だが、他に並び立つものがない絶対的な地位にあることは、考えられうる最も幸せな人間の生き方ではないかもし

れない。A・マズローの指摘するように、自己実現の欲求が満たされることこそが、その人にとって最大の利益になることであるとしよう。すると、彼の自己実現を達成するために、周囲の人々は実に細やかな配慮を要求されることになる。つまるところ、日常生活の中で、彼が己の力で自らを実現していると実感できるように、適度な具合で八百長をすることが必要である。もし彼が科学者になるならば、彼が自分で偉業を成し遂げたと確信できる範囲内で、世界中の優秀な科学者達が彼に「新発見」をさせるためのヒントを助言する必要があるだろう。彼が世界中で最も自分のタイプだと思った配偶者は、あたかも彼自身の性質に惚れこんだかのようにして彼と結婚し、理想の夫婦生活を営まなければなるまい。彼は乗り越えることが困難に見えるが、最後には必ず乗り越えることができる障害や問題に囲まれて生活することになる。

周囲の人間の負担は大きなものになるだろうが、そんなことは関係がない。大事なことは、彼の利益を最大にするよう行動することなのである。もっとも、各人がばらばらに彼に「奉仕」することでちぐはぐが生じ、彼の利益が結果的に最大化されない可能性はある。このような状況は、先の多人数囚人のジレンマ的状况とは異なり、回避は容易である：彼以外の世界中の人間は、彼の利益を最大化するためにはどのように協調的な行動を取ればいいのか、連絡調整すればよいし、するべきなのである。周囲の人間達は、自らの無能のためにこの要求を達成できず、結果的に彼の利益を最大化することに失敗するかもしれないが、これはある当為が自己破壊的であるのとは異なっている。「自己破壊的である」という形容詞がある当為につくのは、複数のエージェントがその当為に従って行動することが、結果的にその当為の達成を妨げる場合であるが、今回は、そのような場合ではないからである。

だれが王様になるかに応じて、10人いれば10通りの当為としての徹底的利己主義が存在するが、Aさんにとっての当為としての徹底的利己主義は、BさんやCさんにとっては当然受け入れがたい考え方であるのだから、〈どの〉当為としての徹底的利己主義も、反対多数で否決されるのではないか。これは正しくない。人は著しく自らの利益に反することはできないから、他人が王様になるような当為としての徹底的利己主義を実践することは無いだろうし、そのような主張に賛成することも無いだろう。しかし事実として普遍的利己主義者であるがゆえに当為としての徹底的利己主義に一人を除いてすべてのものが反対するからと言って、それが当為としての徹底的利己主義を否定することにはならない。反対者が多いという事実は、普遍的利己主義と徹底的利己主義の主張が異なっていることを反映しているだけであり、「あるべき規範は普遍化可能でなければならない。」というカントの黄金律は、規範の実現可能性 (feasibility) の条件であるに過ぎない。

「私」という語は、「今」や「ここ」などとあわせて、指標詞と呼ばれている。指標詞の特徴は、その語が発話される条件によって、指示する対象が異なる点である。「私」という語は発話者を指しているのだから、太郎は「私は太郎だ。」と言うだろうし、次郎は「私は

次郎です。」と言うであろう。話し手によって指すものが違う、という特徴は、「犬」や「猫」などの普通名詞や、「鈴木太郎」や「田中次郎」といった固有名詞とは異なる際立った特徴である。

「今」に関しても同じである。「今」とは発話の時点を示しているのだから、1990年には「今は1990年だ。」と言うであろうし、2005年7月4日20時30分には「今は2005年7月4日20時30分だ。」と言うであろう。近世とか2005年といった名詞が発話の時点にかかわり無く特定の時間（帯）を指しているのとは異なっている。同様のことは「ここ」についても当てはまる。

指標詞の話をしたのは、利己主義と類比的な問題が、「今」についても当てはまるからである。（「ここ」にかんしてもある程度当てはまるが、より類比が鮮やかなのは「今」に関してであるから、ここでは「今」に関して述べることにする。）利己主義とは、つまり「私」を他の人間よりもひいきする考え方のことであるが、同じように「今」を他の時間よりもひいきする考え方もありうるだろう。永井均にならって、これを利今主義と呼ぶことにすると、この利今主義にも、利己主義で区別した4通りが考えられる。

普遍的利己主義とは、「おのおのの時点において、各人はその時点の己の利益を最大にするよう行動する（べきである）」という考え方である（*3）。人間は誰もがいくらかは事実としての普遍的利今主義者なのではないだろうか。翌日に試験を控えているが、誘われた飲み会に行ってしまうとき、彼は明日の自分が困ることなど考えずに、今がよければ良い、と考えて行動している。これは、普遍的利己主義者が、他人の迷惑を顧みずに、自らの利益のために行動するのと同じである。当為としての普遍的利今主義は、刹那主義と通常呼ばれるものである。

この当為としての普遍的利己主義は、当為としての普遍的利己主義と同じく、自己破壊的である。当為としての普遍的利己主義、つまり刹那主義が自己破壊的であるということは、多くの人のよく知るところであろう。つまり「後先」を考えずに、今のことだけ考えて無計画に生きていけば、結果的に自分につけが回ってくるものである。つまり各時点での自己が、ほかの時点での自己をある程度思いやることで、自己は成功した人生をつかむ可能性が出てくるのである。

一方、利今主義にも、徹底的利今主義というものが考えられる。これは、「各々の時点の自己は、今の己の利益を最大にするよう行動する（べきである）」というものである。たとえば、2000年1月1日の太郎が、太郎の生涯のその他の時間の努力を通じて、2001年1月1日の太郎を最も幸せにするようにすることである。いわば、2001年1月1日の太郎が王様であり、その他の時間の太郎は2001年1月1日の太郎の僕だということである。（*4）2001年1月1日の太郎はそのように強く望むかもしれないが、それは決して実現しないだろう。なぜなら2001年1月2日の太郎は、2001年1月2日の太郎が王様になることを望んでいるし、2000年12月31日の太郎は、2000年12月31日の太郎が王様になることを望んでいるからである。

このように、〈どの〉徹底的利己主義も決して実現することは無いが、それが誤った当為であるかどうかは、それだけでは分からない。ただし、徹底的利己主義と比べると、徹底的利己主義に遜色があるのは確かである。私が太郎なら、太郎が王様になるような徹底的利己主義が実現することを望むだろうし、実現するべきなのである。(他の人がそれに反対する、という事実がこの当為にとってどれほど重要だろうか。カントの基準に反するとしても、私はまったく重要ではない、と言いたい。)しかし、今が2001年1月1日であったとしても、2001年1月1日の私だけが王様になるような世界を、2001年1月1日の私は望まないだろう。なぜなら「やがて明日になる」からである。つまり2001年1月1日の私は2001年1月2日の私の利益に無関心ではいられない。過去の私の利益には(トラウマティックな体験が今後の私を苦しめたりしない限りでは)無関心でいられるし、遠い未来の私の利益も軽視しうるが、近未来の私の利益を軽視することは私にはできないのである。このことは、英語で近未来が現在進行形で書かれるという事実と、何か関係があるかもしれない。

「現実」も「今」「ここ」「私」といった指標詞に追加するべきだという主張が提出されている。(※5) この考えに従うと、現実とは発話がなされた世界を指しているのだから、もし広島に原爆が投下されなかったとしたら、人々は「現実には広島に原爆が投下されなかった。」と言うであろうし、もし東京にも原爆が投下されたのだとすれば、人々は「現実には東京にも原爆が投下されました。」と言うであろう。

「現実」が指標詞であるとする、利己主義や利己主義での議論が、「現実」についても当てはまるかどうかに興味を引く問題となる。普遍的利己主義とは、「ある世界のある人は、その世界のその人の利益を最大にするよう行動する(べきだ)」というものである。(※6) 事実としての普遍的利己主義は、おおよそ事実を反映しているように思われるし、当為としての普遍的利己主義は、各世界で自己破壊的であるのは、多人数囚人のジレンマのような状況が存在することから明らかである。

さて、徹底的利己主義とは、「すべての世界のある人は、現実のその人の利益を最大にするよう行動する(べきだ)」というものである。だが、ある世界の人間が、別の世界の人間の利益にどのように干渉しうるだろうか。太郎が次郎の利益を妨害したり促進したりすることはできるだろうし、1999年の太郎が2000年の太郎の利益を妨害したり、促進したりすることはできる。しかし、他の可能性を想定して、その中で人がどのように振舞ったとしても、現実や別の他の可能性における人々の利害に影響することはないのだろうか。これは正しくない。ある可能性における人の振る舞いは、人の予期を介して他の可能性における人の振る舞いに影響を与えることができるのである。たとえば、道が左右に分かれているとして、もし右に行けば誰かが私をひどい目にあわせるだろうなら、私は間違いなく左に行く。

ゲーム理論において、〈脅し〉とは、合理的ではないアナウンスメントによって、利益を得ようとする行為をさす。合理的であるというのは、ほぼ普遍的利己主義的であることに対応する。たとえば、やくざが「俺の言うとおりにしないと、隅田川に沈めるぜ。」といて社員を恫喝するような行為である。やくざはこのように社員を脅すのであるが、実際に社員がやくざのいうことを聞かなかったとしたら、社員を隅田川に沈めることはやくざにとって合理的な行動ではない。なぜなら、殺人を犯せば以後厳しい警察の目を掻い潜って、ひっそりと生きていかなければならなくなるからである。やくざにとって殺人は本業ではない。真実味のある脅しによって、気の弱い人間から金銭をいびり取るのがやくざの仕事である以上、脅しに屈しないような気の強い人間を深追いするのは愚かな行動なのである。もしあなたが、この社員の立場に立つならば、決してやくざの脅しに屈してはならない。あなたがやくざの言うことに逆らっても、やくざが合理的な行動を取る以上あなたを深追いしない、ということを知っているのだから、あなたにとって最も合理的な行為は、脅しを無視することなのである。

しかし、このことは若干のやくざには当てはまらない。やくざは合理的に行動しないかもしれないからである。特に短気で後先を考えずに行動するようなやくざがあなたを脅してきた場合は、それに素直に従ったほうがよいかもれない。なぜなら、もしあなたが脅しに屈しなかったら、彼はかっとなってあなたを殺しあなたを隅田川に沈めるかもしれないからである。この結末は、あなたにとって最悪であろう。

向こう見ずであることがやくざの美德のひとつであるのは、彼らは向こう見ずであると、他人からみなされることによって、彼らの凄みに真実味が帯びてくるからである。（*7）向こう見ずなやくざは長期的な視野を持って合理的に行動しないことによって、結果的に長期的な利益を得ることに成功するだろう。つまり、合理的に行動しないことが、最も合理的であるような場合があるのである。

もしやくざがその見かけに反して合理的であるならば、どのような状況になっても、その時点で知りうる情報を最大限駆使して己の利益を最大にするような行動を取るであろう。これはやくざが事実として普遍的利現実主義的であることを意味している。そのように行動することが、まさに「合理的である」という言葉の意味なのである。普遍的利現実主義的なやくざは、もしあなたが脅迫を無視したら、深追いはしないだろう。やくざが普遍的利現実主義的であると知っていれば、あなたはやくざの脅しに屈してはならない。なぜなら「逆らったら殺す」などという脅しには現実味がないからである。やくざは普遍的利現実主義的であることによって、利益を現実に集中させ、最大の利益をつかむことに失敗するのである。

やくざが見かけどおり向こう見ずであるならば、彼はその時点で知りうる情報を最大限駆使して己の利益を最大にするような行動を取るとは限らない。したがって彼は普遍的利現実主義者ではない。彼の立場は普遍的利今主義である。かれはその時々衝動に素直であり、言うことを聞かない者に暴行を加えないのは、その時の彼の利益に反することであ

る以上、かれは脅しを実行する。そして彼が脅しを実行するような人物であると周囲から目されることで、相手は脅しに屈し、結果的に彼は最大の利益を得ることになる。ところが、利今主義的であることは、利己主義に反することが多々ある：彼は利今主義的であることによって、しばしば逮捕され、人生における利益の総計は、もっとスマートなやくざより少ないものになるだろう。

それでは、人生における利益の総計を減らすことなしに脅しを成功させることはできないだろうか。考えられる方法のひとつは、彼が徹底的利現実主義者になることである。かれは、現実の利益を最大にするように行動するから、これに成功すればジレンマを解消することができるはずである。徹底的利現実主義とは、これまでの比喩を利用すれば、現実の己が王様となって、他の可能性における己を僕とし現実に奉仕させることを意味している。徹底的利現実主義は、徹底的利己主義と比べれば、まだ実現可能性がありそうである。なぜなら、現実以外のものは現実には存在しないため、反論が噴出してくる可能性が存在しないからである。

徹底的利現実主義者は、普段の生活では普遍的利現実主義者と同じようにスマートな振る舞いをする。不必要なトラブルを招いて逮捕されることも最小限におさえられる。しかし、だれかを脅して言いなりにさせたいときには、彼は普遍的利現実主義とは異なる行動を取るだろう。すなわち、もし相手が脅しに屈しなかったら、彼は相手を隅田川に沈めるのである。このような行為は、相手が脅しに屈しなかった場合の対処として合理的ではない。彼は結果的に実現しない他の可能性において己に犠牲を強いることによって、**現実においては最高の利益をつかむ**のである。これはちょうど徹底的利己主義において、他者に犠牲を強いることで、私の利益を最高にするのに類比的である。

* 1 永井均 事典哲学の木 講談社 2002年 pp120~123

* 2 デレク・パーフィット著 森村進訳 理由と人格—非人格性の倫理 1998年 勁草書房

* 3 ここで挙げた利今主義は、同時に利己主義でもある。つまり〈今〉の〈私〉の利益だけを考えなさい、ということである。これとは異なり、純粋な利今主義、つまり、「今に生きるすべての人間は協力して、今のすべての人間の利益を最大にするように行動しなさい。」というものも考えられる。今という時間の指す範囲が狭いものならば、このような利今主義を考察する価値は無いが、今が数十年幅をもつと考えれば、このような純粋な利今主義へのアンチテーゼが世代間倫理だということになるだろう。

* 4 利今主義は利己主義を含むと前項で述べたが、利今主義に含まれる利己主義にも4通りを区別することができるのは言うまでもない。つまり4通りの利今主義には、それに非利己主義、事実としての／当為としての普遍的利己主義、事実としての／当為としての徹底的利己主義、の5通りのバージョンが考えられることになり、計20通りの利今主義が考えられることになる。本文では、利今主義に当為としての普遍的利己主義が組み合わ

さる場合のみを考えることにする。

*5 『『現実』は指標詞である』という主張は、「可能世界は存在する」するという主張とセット販売であり、可能世界は存在しないのだから、「現実」は指標詞である』という主張も正しくない、という意見が存在するが、このような批判は的外れであるように思われる。私の考えでは、『『現実』は指標詞である』という主張は、「可能世界は存在する」するという主張とセット販売ではない。可能世界は存在しないだろう。しかし可能世界が存在するかのように扱い、その上で「現実」を指標詞として使用するの、もっとも自然な言語の使用法なのである。「もし広島に原爆が投下されなかったとすれば、終戦後に丸山真男は『アメリカは広島に原爆を投下する計画を立てていたが、現実には原爆は投下されなかった。』と言ったかもしれない。」という文に、日本語としてどこかおかしいところがあるだろうか？この文では「現実」はあきらかに指標詞として使われているが、可能世界の存在を前提にしているわけではない。むしろ「もし広島に原爆が投下されなかったとすれば、終戦後に丸山真男は『現実にはアメリカは広島に原爆を投下したが、ソ連の動向次第では原爆は投下されなかったかもしれない。』と言ったかもしれない。」という文の方こそ、「現実」という語の使用法を誤っているとと言えるだろう。存在しないものを指す固有名詞（「ヘラクレス」、「オイディプス」など）が現に存在していて一定の機能を担っていると同様に、存在しない可能世界を指す指標詞「現実」があつて、現に一定の機能を担っているのである。言葉の分析はこの現実から出発しなければならない。

*6 ここでの利現実主義は、同時に利己主義的であるが、純粋な利現実主義も存在し、それは「ある世界では、人々はその世界における人々の利益を最大にするように行動する（べきだ）。」というものである。

*7 実際に向こう見ずである必要は無い。相手がいうことを聞かない場合は隅田川に相手を沈める、ということにコミットメントしていなくても、そのような凶行をためらわず実行するだろうと相手にアナウンスメントすることに成功すれば、脅しは成功なのである。逆に、アナウンスメントに失敗したにもかかわらず、そのようにコミットメントしていることは、やくざにとっても相手にとっても最悪の結末をもたらすことになる。（つまり、やくざは警察に追われ、相手は命を落とすことになる。）一般的に人間は、約束を守る人と思われていながら、実際には約束を守らない人であるとき、最大の利益を売ることができるのである。